

Title	書評：樫尾直樹著 『スピリチュアリティ革命：現代霊性文化と開かれた宗教の可能性』 春秋社、2010年
Sub Title	
Author	岡本, 亮輔(Okamoto, Ryosuke)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2011
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.16 (2011. 7) ,p.139- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20110709-0139">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20110709-0139</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評：樫尾直樹著

『スピリチュアリティ革命—現代霊性文化と開かれた宗教の可能性』

春秋社、2010年

岡本亮輔

---

本書は、これまでも共編著の『スピリチュアリティを生きる—新しい絆を求めて』（せりか書房、2002年）、『スピリチュアリティの社会学—現代世界の宗教性の探求』（世界思想社、2004年）といった論著を通じて日本におけるスピリチュアリティ研究を牽引してきた著者による初めての単著である。以下では、章ごとの内容を撮要した上で、「宗教性の再配置における個人の自律性」という評者の問題意識に引き寄せながら若干のコメントを試みたい。

第一章、第二章では、宗教的なものが現代社会のすみずみに浸透している状況が確認され、「スピリチュアリティ」をキーワードにする必要性が論じられる。エコロジー、デス・エデュケーション、個人的動機に基づく四国遍路などが言及され、現代宗教を考える際には教团的・制度的宗教性に限定するのではなく、スピリチュアリティを全域化しつつあるものとして捉える意義が説かれ、特にベルクソンの「開かれた宗教」概念の先駆性と重要性が確認される。そして鈴木大拙の日本的霊性、ヨーガ、セラピー文化、セルフヘルプ・グループ、終末医療といった諸領域におけるスピリチュアリティ論が参看され、K・ウィルバーの議論に依拠しながら、身体性・超越性・実存性・利他性・全体性という五要素、個人意識的・社会倫理的・文化価値的という三類型、自己否定・自己超越という契機などによってスピリチュアリティ概念の特徴づけが行われる。

第三章では、現代のスピリチュアリティ文化の前史として、ニューエイジ運動、トランスパーソナル心理学、新宗教運動がとり上げられる。特に欧米における議論も踏まえながら、大本・世界救世教系教団、創価学会といった日本の新宗教運動がニューエイジの一潮流として位置づけ直され、そうした新宗教教団の教えと実践が現代のスピリチュアリティ文化と親和性をもつことが指摘される。第四章では、近代化の過程で抑圧され見えにくくなった日本のスピリチュアリティ文化の後景が描かれる。大拙が論じる「大地性」、日本独特の社会空間の構成をもたらす「世間」、日本人の宗教的世界観の特徴としての「祖先」がとり上げられ、年中行事・礼節礼法・武道・奉仕といった日本的スピリチュアリティがそれらを基層として展開していることが指摘される。そして次章以下では、より各論的に現代社会のスピリチュアリティ文化が論じられる。

第五章では、スピリチュアル・ケア、アルコールクス・アノニマスといったセラピー文化におけるスピリチュアリティに光が当てられる。これらの事例は「神観念の変化」という観点から興味深いものである。上のようなセルフヘルプ系の集団においては明確な神観念が提示・共有されるのではなく、「ハイヤー・パワー」「自分なりに理解した神」といったより緩やかな

岡本亮輔「書評：樫尾直樹著『スピリチュアリティ革命—現代霊性文化と開かれた宗教の可能性』」

『三田社会学』第16号（2011年7月）139 - 141頁

神観念が、弱さを開示し合うことで生まれる共同性の中で醸成される。そしてそうした点において、セラピー文化がはらむスピリチュアリティは教团的宗教性の対極にあるものと位置づけられ、現代社会における宗教的布置の再編成の好例として捉え返される。第六章では、「現代アニミズム」をキーワードにして、テレビ・映画・アニメ・マンガをはじめとする大衆文化の中のスピリチュアリティが論じられる。江原啓之、宮崎アニメ、『ガイアシンフォニー』、『バガボンド』など様々な事例がとり上げられる。個々に違いはあるものの、大局的にみれば、これらの背後には汎神論的なアニミズムの世界観が控えており、こうした大衆の表象文化は宗教的世界観の再提示を行うことで現代の神話としての役割を果たしていることが指摘されている。

第七章では、「ニューエイジ文化としての新宗教」という理解を引き継ぎながら、様々な新宗教の教えや身体実践の事例がより詳しく分析されているが、新宗教が著者の提唱する「開かれた宗教」になりうるかという点についてはきわめて両義的であるという。新宗教は、従前にとり上げられた事例に比べると、成立宗教として明確な組織的輪郭をもち、著者が論じるスピリチュアリティの三類型を含みもっており、スピリチュアリティ文化のセンターになる可能性も持っている。しかし他方で、教団という組織性が自己防衛と内部教化への自己閉塞をもたらし、新宗教が開かれた宗教として開花することを阻害するとも考えられるのである。終章となる第八章では、カルト化、スピリチュアル・アビューズといった宗教文化の「誤用」「悪用」にも触れながら、開かれた宗教の条件が示される。そして、「いっしょでばらばら」「私たちはひとつである」という非媒介的共同性に基づく開かれた宗教への変革は「異宗教間対話の理想像」にも合致することが提言される。

以上のように本書では、これまでは散発的にしかとり上げられてこなかった（従来の意味での）非宗教的領域で展開する宗教文化も含めた様々な事例が「スピリチュアリティの全域化」という問題意識の下に関連づけられながら説得的に論じられている。理論的にも先行研究をダイナミックに整理し批判的に受容しながら、著者の構想する「開かれた宗教」の輪郭が鮮やかに示されている。議論の射程は広く、宗教研究に留まらず、様々な研究領域への応用と展開を期待させられる。

著者の意図とは異なるかもしれないが、評者には本書は「宗教の私事化論」に掉さず議論として理解できる。それは終章において示される個々人の自律性と意志の尊重、個人のスピリチュアリティ探究のためのセンターとしての教団、聖地や神話的言説への執着の放棄、宗教的階層性の廃棄といった開かれた宗教の要件に特にうかがうことができ、ニュアンスに違いはあるが、Th・ルックマンの「見えない宗教」やS・ブルースの「思想・儀礼・癒しの地球規模のカフェテリア」といった現代宗教論と呼応している。本書では、各章の概要でみた通り、後半に進むに連れて客観的分析から「開かれた宗教」をめぐる規範的提言へと議論が展開する。本書の性格からしてこうした規範性は必然のものであるが、一方で、「開かれた宗教」が語られているにもかかわらず、評者にはある種の「重さ」も感じられる。そして本書がもつ重さは、宗教の私事化を論じた既存研究と同じような予断を共有していることに由来するよう思われる。

この点を考える際に興味深いのが、本書と対照的な宗教理解をとる Ch・テイラー『今日の宗教の諸相』である。タイトルに示唆される通り、テイラーは W・ジェームズの批判を行うわけであるが、その核となるのが、「宗教を何よりも個人が経験する何ものかであると見なし」、「個人的経験であるいきいきとした宗教的経験」と「宗教的生活」を区別しようとするジェームズ流の宗教理解である。ジェームズにおいては、教会や教団は宗教の根源にあった靈感の伝播という二次的役割を果たす派生物にすぎず、むしろ、無垢であった靈感を汚すものとして忌避される。実際、「宗教とは、個々の人間が孤独の状態にあって、いかなるものであれ神的な存在と考えられるものと自分が関係していることを悟る場合だけに生ずる感情、行為、経験である」<sup>1)</sup> というジェームズの宗教定義は、本書で論じられる現代の根本課題としての孤独、自己超越意識の獲得、個人的体験の重視といった議論と即応するものだろう。

テイラーによれば、ジェームズの宗教理解は「自分たちの宗教を真剣に受けとめ」なければならないという「圧力」を生み出し、「単に外面的な儀礼に参加するだけで内省と改心の約束を伴った秘密告白を要求しないような人は、低く評価される」傾向をもたらし、特に個人の自律性を重視する近代文化の趨勢の下では、こうした宗教のあり方こそが「宗教の今日とりうる唯一の形である」という「誤解」を生み出す<sup>2)</sup>。評者には、このテイラーのジェームズ批判は本書についても一部当てはまるように思われる。特に既存教団にその組織的アイデンティティの廃棄を求めているように見える本書後半の議論は、畢竟、宗教的共同体を派生的なものとして捉え、すべての人に達人的と呼べるような宗教的コミットメントを求めることにはないか。別言すれば、スピリチュアリティの全域化を通じて宗教的なものへの参入が相対的に容易になったのであれば、様々なスピードとやり方で信仰を深める人々が存在しているのであり、宗教的専門家が存在する一方で、「時々信仰する普通の人たちがいる」という状況も広がりつつあると言えるのではないだろうか<sup>3)</sup>。

しかし、こうした問いは本書の問題設定とは十全に重なるものではなく、あくまでフランス・カトリックという制度性・凝集性の高い対象を研究する評者が感じる個人的な問題意識に基づくものにすぎない。個人の宗教的自律化を背景とする宗教表出は確かに広い領域で展開しており、それらの新しい宗教性の把握に本書が提示する観点から踏み込んでゆくことは有効な研究戦略である。日本に限らず、今後の現代宗教論を構想する上で、本書が重要なメルクマールとなることに疑いはないものと思われる。

### 【注】

- 1) W・ジェームズ『宗教的経験の諸相(上)』榊田啓三郎訳、岩波書店、p. 52。
- 2) Ch・テイラー『今日の宗教の諸相』伊藤邦武・佐々木崇・三宅岳史訳、岩波書店、2009年、pp. 9・10 および p. 20。
- 3) 同書、p. 8

(おかもと りょうすけ (財) 国際宗教研究所研究員)